

小説における「コレ」と「ソレ」の文脈展開機能 —持ち込み内容を中心に—

ちょう しじょ
張 子如

同志社大学大学院博士課程後期課程
西北大学外国語学院日本語学部

キーワード

「コレ」・「ソレ」、持ち込み内容、持ち込み方

要旨

本稿では小説「清兵衛と瓢箪」を例として、ほかの20編の小説のデータを補充として、文脈展開機能の中心的な要素である持ち込み内容の側面から「コレ」と「ソレ」の違いを考察した。

結果として、小説において、「ソレ」の持ち込み内容は、情報量が少なく語句や節レベルの短い言語単位の内容で表されることの多い「物体」「行為・心情」など具体的なものを持ち込みやすい。それに対して、「コレ」の持ち込み内容は、情報量が多く文や連文レベルの長い言語単位の内容で表されることの多い「事態・様相」「発言等の内容」のような抽象的なものとなりやすいと考えられる。

1. はじめに

これまで指示代名詞「コレ」「ソレ」についての研究は、日常会話や評論文を資料としたものが多く、小説テキストを資料とした研究はまだ少ない。小説は普通の論文などと違い、会話文・心話文と地の文があり、登場人物や事物などの表現方法が多様である。近年、片村（1984）、金水・田窪（1992）、藤井（2004）は小説テキストの特徴を考慮した研究を行っているが（注1）、いずれも文章展開の観点からの考察ではない。佐久間（2002）は、指示語を文章中の連文や段（注2）の大小様々の意味のつながりとまとまりを表す言語形式の一つとし、文脈展開形態と呼んでいる。また、指示語は「文の文脈」を越える「文章の文脈」の成立に関与し、文脈展開機能を有し、特に「段」の統括の観点、つまり、文章や段において、指示語が意味上、文章や段全体を締めくくる機能を持つという観点から指示語の文脈展開機能を分析している。馬場（2006）は、理解過程の立場に立ち、「指示語による文脈展開は、すでに存在する情報を参照先として探査する指令と、その指令に基づく持ち込み内容の特定、そして、その持ち込み内容と指示語を含む言語的文脈との連結によって成立する」と述べ、指示語の文脈展開機能を認めている。これらを受けつつ、「コレ」「ソレ」がどのように文脈展開機能を果たすのかさらに具体的に考察する必要がある。

指示語は必要な内容を自らの位置に持ち込むことによって、文脈展開機能を果たしている。筆者は、持ち込み内容、指示語と持ち込み内容の距離、持ち込み内容の変容、そして指示語の後続語句という四つの側面から文脈展開機能を観察することができると考えた（注3）。本稿では、小説「清兵衛と瓢箪」を例として、文脈展開機能の中心的な要素である持ち込み内容とその変容の

側面から「コレ」と「ソレ」の違いを考察する。必要に応じて、ほかの20編の小説(注4)のデータを利用することもある。「清兵衛と瓢箪」の引用例は岩波文庫の『小僧の神様』(2002)による。ほかの引用例はすべてCD-ROM版『新潮文庫の100冊』による。

2. 「コレ」・「ソレ」の持ち込み方

本稿では小説の基盤である地の文に出現する文脈指示の「コレ」「ソレ」の文脈展開機能を考察する。小説テキストにおいて、「コレ」「ソレ」は前後の文脈からどんな内容をどのように当該位置に持ち込み、どのように文脈を展開させていくのかについて具体的に説明する必要がある。

文脈展開機能の特徴について、最も中心的なのは持ち込み内容である。まず持ち込み内容がどのように指示語の位置に持ち込まれるかについて見ておく。「コレ」と「ソレ」は代名詞であるから、文の成分として体言の働きをする。ゆえに、名詞や名詞句などの体言類を「コレ」「ソレ」の位置に持ち込む。持ち込むとは、理解過程における行為で、読み手(書き手も含む)が指示語を見た時、その指示語は何を指示しているか前後の文脈から必要な内容を「コレ」「ソレ」の位置に持ち込んで理解することである。

地の文における文脈指示は「清兵衛と瓢箪」において、「コレ」は3例で、「ソレ」は19例であり、「ソレ」が多用されることが分かる(注5)。以下は「ソレ」を例にとって、持ち込み内容の持ち込み方について具体的に検討する。

まず「ソレ」が名詞を持ち込む場合を見てみよう。

- (1) これほどの凝りようだったから、彼は町を歩いていけば骨董屋でも八百屋でも荒物屋でも駄菓子屋でもまた専門にそれを売る家でも、凡そ瓢箪を下げた店といえれば必ずその前に立って凝っと見た。

「それ」は前の段落に出ている「瓢箪」そのものを受け、「瓢箪」はどのような様子であるかなどの相関情報を触れておらず、名詞「瓢箪」を変容せずにそのまま持ち込んでいる。

また、名詞句を持ち込む場合、どんな変容をするのであろう。

- (2) さて、教員は清兵衛から取り上げた瓢箪を穢れた物でもあるかのように、捨てるように、年寄った学校の小使にやってしまった。小使はそれを持って帰って、くすぶった小さな自分の部屋の柱へ下げておいた。

(2)の「それ」は前文の名詞句である「取り上げた瓢箪」をそのまま持ち込む。これは(1)と同様に名詞相当の成分を抽出して変容せずに持ち込む、いわゆる抽出指示である。

しかし、照応詞が名詞句でない場合、どうなるのであろう。

- (3) 翌朝は起きると直ぐ彼は鐘を開けて見る。瓢箪の肌はすっかり汗をかいている。彼は厭わずにそれを眺めた。

(3)の「それ」は「瓢箪」という名詞のみを持ち込むのではなく、「肌はすっかり汗をかいている」「瓢箪」を持ち込むと理解されるのである。前文の先行詞である「瓢箪の肌はすっかり汗をかいている」を加工して、必要に応じて切り取って整理して名詞句「肌はすっかり汗をかいている」「瓢箪」に変容してから、「それ」の位置に持ち込むと解される。先行文脈から必要な内容を

抽出して加工するという変容をしている。

(4) こんな話を聞きながら清兵衛は心で笑っていた。馬琴の瓢というのはその時の評判な物ではあったが、彼はちょっと見ると、——馬琴という人間も何者だか知らなかったし——すぐ下らない物だと思ってその場を去ってしまった。

「あの瓢はわしには面白うなかった。かさ張つとるだけじゃ」彼はこう口を入れた。

それを聴くと彼の父は目を丸くして怒った。

「何じゃ、わかりもせん癖して、黙っとれ！」

(4) の「それ」は前の「あの瓢はわしには面白うなかった。かさ張つとるだけじゃ」という発話内容を名詞句化して、名詞として自らの位置に持ち込み、目的語として働くのである。さらに言えば、そのような会話の内容（趣旨）を読み手は理解し、その不満の言葉を要約するという変容をしていると言ってもいい。

このように、「コレ」「ソレ」は前後の文脈にある名詞あるいは名詞句をそのまま、または他の成分を名詞化するか長い内容を要約して自らの位置に持ち込むのである。

3. 「コレ」・「ソレ」の持ち込み内容

3.1 「清兵衛と瓢箪」における「コレ」「ソレ」の持ち込み内容の偏り

「コレ」「ソレ」の持ち込み内容の特徴について、まず以下のような例を見てみよう。

(5) 最初茶渋で臭味をぬくと、それから父の飲みあました酒を貯えておいて、それで頻りに磨いていた。

(6) ある日彼はやはり瓢箪の事を考え考え浜通りを歩いていると、ふと、眼に入った物がある。彼ははッとした。それは路端に浜を背にしてズラリと並んだ屋台店の一つから飛び出して来た爺さんの禿頭であった。

(7) 清兵衛はそれを瓢箪だと思ったのである。

(8) 手入れが済むと酒を入れて、手拭で巻いて、罐にしまって、それごと炬燵へ入れて、そして寝た。

(9) 「子供じゃけえ、瓢いうたら、こういうんでなかにゃあ気に入らんもんと見えるけのう」大工をしている彼の父を訪ねて来た客が、傍で清兵衛が熱心にそれを磨いているのを見ながら、こう言った。

(10) 間もなく、赤い顔をしてハアハアいいながら還って来ると、それを受け取ってまた走って帰って行った。

(11) しまいには時間中でも机の下でそれを磨いている事があった。

(12) それを受持の教員が見つけた。修身の時間だっただけに教員は一層怒った。

(13) 清兵衛の父はふと柱の瓢箪に気がつく、玄能を持って来てそれを一つ 4 割ってしまった。

(14) 骨董屋はためつ、すがめつ、それを見ていたが、急に冷淡な顔をして小使の前へ押しやると、「五円やったら貰うところ」といった。

(15) 結局五十円で漸く骨董屋はそれを手に入れた。

(16) だから仮令瓢箪を売る家はかなり多くあったにしろ、殆ど毎日それを見歩いている清兵衛には、恐らく総ての瓢箪は眼を通されていたらう。

以上の (5) ~ (16) の 12 例の「ソレ」はすべて形を持ち、感触を確かめることができる物体を指示している。(5) は「酒」、(6) は「眼に入った物」、(7) は「爺さんの禿頭」、(8) は瓢箪の入った「罐」、(9) ~ (15) は「瓢箪」、(16) は「瓢箪を売る家」を指し示している。いずれも具体的に形を持ち、一定の空間を占めている物体である。「清兵衛と瓢箪」における 19 例の「ソレ」のうち、15 例は上記のような具体的な物体を持ち込んでおり、高い比率であることが分かる。

しかし、「ソレ」は物体のみならず、抽象的な事物を指示することもある。次は小説の冒頭である。

(17) これは清兵衛という子供と瓢箪との話である。この出来事以来清兵衛と瓢箪とは縁が断れてしまったが、間もなく清兵衛には瓢箪に代わる物が出来た。それは絵を描く事で、彼はかつて瓢箪に熱中したように今はそれに熱中している……

この 2 例の「それ」はそれぞれ「瓢箪に代わる物」、「絵を描く事」を意味している。「瓢箪に代わる物」の「物」は物体を指す面もあるが、抽象的な概念を指すこともできる。ここで後者の抽象的な概念を意味している。また、先の (4) の発話内容のような抽象的なものを持ち込む例もある。

それに対して、「コレ」はどんな内容を持ち込むのであろう。「清兵衛と瓢箪」において、「コレ」は具体的な物体を指し示す例は一つもない。文脈指示の「コレ」は総計 3 例で、先に見た例 (17) の「これ」はこれから語る物語全体を意味する。もう 2 例はそれぞれ発言内容と「絵を描く事」を指示している。いずれも具体的な物体ではなく、物語という出来事や発話内容など手で感知できない抽象的なものを指し示している。

以上は「清兵衛と瓢箪」の用例で、「ソレ」の指示対象には抽象的な内容を持ち込むことがあるが、具体的な物体を持ち込む例が多くみられる。それに対して、「コレ」の指示対象には物体がなく、抽象的な内容のみある。

3.2 カテゴリー別に見られる「コレ」「ソレ」の持ち込み内容

3.1 の「清兵衛と瓢箪」における「コレ」と「ソレ」の持ち込み内容の傾向について、ほかの 20 編の小説を検討してみる。「コレ」「ソレ」の持ち込み内容は次のようなカテゴリーに分類する。

人物：名前や性別や官職名などで人間を表現するものである。

物体：「鳥」、「雪」、「空気」など有形で具体的なものである。

行為・心情：行為とは笑う、行くなど具体的な動作の表現で、心情とは喜びや苦悶など心理的活動の表現である。

事態・様相：事態とは物事の状態やなりゆきで、様相とは物事のありさまや様子などである。

発話等の内容：発話、考え、手紙などの具体的な内容である。

その他：「力」、「関係」など以上の五つのカテゴリー以外のものである。

上記のカテゴリー別に調査すると、その結果は【表 1】のようになる。

【表1 「コレ」「ソレ」の持ち込み内容】

	人物	物体	行為・心情	事態・様相	発話等の内容	その他	合計
コレ	21(15%)	22(16%)	14(10%)	56(41%)	13(9%)	11(7%)	137(100%)
ソレ	23(4%)	161(30%)	116(21%)	144(26%)	31(6%)	68(13%)	543(100%)

まず「コレ」「ソレ」別に見てみる。「コレ」において、「事態・様相」の場合が41%と最も多く、次に「物体」が16%で、「人物」が15%と続く。それに対して、「ソレ」において、最も多いのは「物体」(30%)の場合で、次に多いのは「事態・様相」で、「行為・心情」は第三位を占めている。

「コレ」「ソレ」の差が特に目立つ項目は、「人物」と「物体」「行為・心情」の場合である。近藤(1995)はレ系指示語は人を指すと失礼になるため、あまり人物を指示しないと指摘しているが、小説の地の文の場合は、語り手が登場人物に直面して「コレ」「ソレ」とその人物を指示するのではないため、レ系指示語も使えるのである。【表1】に示したように、「人物」を持ち込む場合、「コレ」は21例で、「ソレ」は23例であり、用例数がほぼ同じぐらいである。「コレ」「ソレ」の総数の差(「ソレ」は「コレ」の約4倍となっている)から見れば、非常に意義のある現象である。要するに、小説において、「人物」を持ち込む場合、「コレ」が多用され、登場人物に焦点を当てて、身近なものとして現場的に表現されることが多いと考えられる。しかし、「物体」を持ち込む場合、「ソレ」が161例で「コレ」の7倍強になっており、圧倒的に多い。小説の中に客観的な存在である具体物に関して、中立の「ソレ」が多く用いられると考えられる。また、具体的な「行為・心情」を持ち込む場合、「ソレ」が「コレ」の8倍強になっており、「ソレ」が多用される傾向が見られる。

以上の結果は「清兵衛と瓢箪」の傾向と似ており、小説一般の傾向であると考えられる。

3.3 カテゴリーと持ち込み内容の長さ

前節で見た各カテゴリーの持ち込み内容は表現される言語単位の長さや密接に関わってくる。カテゴリーのみならず、言語単位の長さも同時に見ることで、より具体的に持ち込み内容の特徴を把握できる。

本稿で「コレ」「ソレ」は指示対象の内容によって表現の言語単位の長さが異なることを考慮し、『日本語学研究事典』(2007)を参考にして、言語単位の基準を語句、節、文、連文という四つのレベルに規定する。すなわち、「犬」「空気」「旅行者」のような名詞と、「私の本」「白い雪」「教室に来た人」のような名詞中心の名詞句を合わせて語句と言う。節は「今日は雨なので、もう出かけない」のような主節、従属節のことである。文は最後に「。」「?」「!」をつけた一文のことで、連文は二文以上のいくつかの文からなっているまとまりである。文章において、指示対象は語・節・文・連文といずれかの言語単位で表すことができる。「コレ」「ソレ」はその指示対象を表現している言語単位の内容を必要に応じて指示語の位置に持ち込む。指示語の持ち込み内容の言語単位は文以下の語句や節である場合もあれば、文や連文、章のような大きなまとまり、な

いし文章全体を持ち込む場合もある。

持ち込み対象（指示対象）とその持ち込み内容を表現する言語単位との間に関わりがある。

「清兵衛と瓢箪」において、「ソレ」の15例の物体を持ち込む場合では、11例は「瓢箪」や「瓢箪を売る家」など名詞か名詞句のような語句を持ち込んでいる。つまり、具体的な物体を表現する場合、名詞や名詞句など語句の言語レベルで示す場合が多い。一方、発話の内容や事柄など抽象的な内容を表現する場合、たとえば、(17)の「これ」は文章全体を意味し、(4)の「これ」は長い連文からなっている発話内容を持ち込んでいる。つまり、事柄や事態など抽象的な内容を表現するとき、文や連文のような言語レベルで示す例が多い。

「清兵衛と瓢箪」において、以上のような指示対象のカテゴリーとその表現される言語単位とは密接な関係がある傾向が見られるが、このような傾向を踏まえて、「コレ」と「ソレ」の持ち込み内容の傾向を具体的に検討することにする。小説一般の傾向を考察するために、ほかの20編の小説を資料とし、上記六つのカテゴリー別にその持ち込み内容の言語単位を調査したところ、【表2】のような結果となる。

【表2 「コレ」「ソレ」の指示対象とその持ち込み内容の長さ】

	人物		物体		行為・心情		事態・様相		発話等の内容		その他		合計	
	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ
語句	8	15	19	138	2	27	0	5	0	0	0	33	29(21%)	218(40%)
節	2	4	2	10	7	64	6	28	1	3	1	15	19(14%)	124(23%)
文	5	3	1	12	4	23	18	69	8	18	7	19	43(31%)	144(26%)
連文	6	1	0	1	1	2	32	42	4	10	3	1	46(34%)	57(11%)
合計	21	23	22	161	14	116	42	144	13	31	11	68	137(100%)	543(100%)

持ち込み内容の長さから見れば、「コレ」の場合、文と連文レベルの比較的言語単位の長いものを持ち込む例が多い。それに対して、「ソレ」の場合、語句レベルの内容を持ち込む例が最も多いが、節と文レベルの内容を持ち込む例も多く見られる。

指示対象のカテゴリーと持ち込み内容の長さとの関わりについて、「コレ」も「ソレ」も、指示対象が「人物」「物体」である場合、語句レベルの内容を持ち込むことが多い。「行為・心情」の場合、節レベルの内容が最も多い。「事態・様相」「発話等の内容」の場合、文と連文レベルの内容を持ち込む例が最も多く見られる。つまり、指示対象が同じカテゴリーであれば、「コレ」「ソレ」を問わず、その持ち込み内容の長さ（言語単位）もほとんど同じ傾向である。

以下は「コレ」「ソレ」の指示対象を「人物」「物体」「行為・心情」「事態・様相」「発話等の内容」という五つのカテゴリーに分けて、その持ち込み内容を表現する言語単位の長さをそれぞれ具体的に考察する。なお、「その他」の場合は雑なもので、ここで略すことにする。

3.3.1 人物を持ち込む場合

名前や性別や官職名など人物を指示対象とした時、次の【表3】のような言語単位の内容が持ち込まれる。

【表3 人物の場合】

	語句	節	文	連文	合計
コレ	8	2	5	6	21
ソレ	15	4	3	1	23

【表3】に示したように、人物を指示対象とした場合、「コレ」「ソレ」両方とも語句レベルの内容を持ち込む例が多いが、「コレ」は文と連文レベルの内容を受け取る例も少なくない。

- ① 浜辺に往く姉の安寿は、川の岸を北へ行った。さて潮を汲む場所に降り立ったが、これも汐の汲みようを知らない。心で心を励まして、ようよう杓を卸すや否や、波が杓を取って行った。
(森鷗外、「山椒大夫」)

「これ」はここで先行の一文である「浜辺に往く姉の安寿は、川の岸を北へ行った」ではなく、「姉の安寿」を意味する。「浜辺に往く」や「川の岸を北へ行った」という動作とはあまり関わっていない。「安寿」という人物に焦点を当てて表現する。つまり語句「安寿」という内容を持ち込むのである。

- ② 里子には父親も母親もあった。だが、慈念にはそれがなかった。

(水上勉、「雁の寺」)

「それ」は先行する文の中の語句「父親」「母親」を意味し代行するのである。「これ」「それ」を用いて人物を指示する時、その人物がどんな様子であるかどんな性質を持っているかに注目せず、その人物そのものを持ち込む場合が多い。しかし、文と連文単位で人物を持ち込む場合はどうなるのであろう。

- ③ 背を返し、小兵衛が立ち去って行った。足どりが何かもつれるように見えた。

大治郎は、むしろ茫然と、これを見送ったのみである。(まゆ墨の金太郎)

ここで「これ」は「小兵衛」という人物を対象として指示しているが、「小兵衛」のみならず、前の二文全体を変容して「背を返し」「立ち去って行って」「足どりが何かもつれるように見えた」「小兵衛」を持ち込むのである。このように連文という言語単位で人物を表現する場合、その人物の様子について叙述したのを受けてその様子を持っている人物を持ち込む。

上記のように、人物を持ち込む場合、傾向は二通りに分かれる。一つは①②のようにその人物のみ焦点を当て、その人物についての特性や様子を持ち込まない場合には、語句の言語単位で表現する例が多いことである。もう一つは③のようにその人物の様子について叙述し、その様子を持っている人物を持ち込む場合、文と連文レベルで表現する例も少なくないことである。後者の場合、その人物の様子などを一緒に受け取り、文と連文レベルの内容を持ち込むのは「コレ」のほうが用いられやすいと考えられる。

3.3.2 物体を持ち込む場合

「鳥」、「雪」、「空気」など有形で具体的な物体を持ち込む時、【表4】に見られるように、「ソレ」が多用されることが分かる。小説テキストにおいて、一般的に、物体は人物のような主な描写対象ではなく、物語世界で客観に存在するものとして、語り手が中立的な態度で描写するので、中立の態度を示す「ソノ」が多く用いられていると考えられる。

【表4 物体の場合】

	語句	節	文	連文	合計
コレ	19	2	1	0	22
ソレ	138	10	12	1	161

また、持ち込み内容の長さから見れば、「コレ」も「ソレ」も語句の言語単位で表現される例は最も多い。次の例を見てみよう。

④ 出来る事なら、何か突然故障が起って一旦、芋粥が飲めなくなってから、又、その故障がなくなって、今度は、やっとこれにありつくと云うような、そんな手続きに、万事を運ばせたい。
(芥川龍之介、「芋粥」)

⑤ 俊介は課長が投げてよこす書類綴りを手に受けた。繰ってみると、どの報告書にもそれを送って来た至急便の封筒がついていた。
(開高健、「パニック」)

④の「これ」は先行文脈にある「芋粥」を意味している。「芋粥」に関する「飲めなくな」などの叙述とは関係がない。「芋粥」という物体を表現する語句だけを持ち込んでいる。⑤の「それ」は「報告書」という物体を指示しており、しかも「報告書」という語のみ持ち込んでいる。

以上物体を持ち込む場合は文と連文レベルの言語単位で表現される人物の場合と違い、「コレ」も「ソレ」も語句レベルの内容を持ち込む例が多いことが分かる。小説において、客観的な存在である物体を簡潔に表現すし、基本的に「ソレ」で指示しやすい傾向があると考えられる。

3.3.3 行為・心情を持ち込む場合

では次に、笑う、行くなどの具体的な動作や喜び、愛などの具体的な心理的活動を持ち込む場合（【表5】）を見てみよう。

【表5 行為・心情の場合】

	語句	節	文	連文	合計
コレ	2	7	4	1	14
ソレ	27	64	23	2	116

【表5】に示したように、「ソレ」は116例で、「コレ」の8倍強になっている。具体的な動作や心理活動は「ソレ」で表現しやすいと思われる。

また、持ち込み内容の長さから見れば、「コレ」も「ソレ」も節というレベルの言語単位の内容を持ち込むことが多い。それは動詞や形容詞で行為・心情を表現することが多く、動詞や形容詞が節という言語単位になりやすいからである。また「ソレ」のほうが圧倒的に多い。小説において、行為・心情は物語の進行の中心的な要素であり、基本的な「ソレ」を用いて、物語を進行させるからである。

⑥ 私は、ふいに顔が汗ばむような気がし、おどけて、ペン軸で志乃の頬を突つしたが、それがかえって私を志乃へ駆り立てた。私は、いきなり志乃の首に腕をかけると、畳の上
にひき倒した。
(三浦哲郎、「初夜」)

⑦ 伊木は、彼女について或る事柄を聞き知っていた。彼女が伊木の父親を愛したことがある、ということである。それは、深く入り組んだ関係ではなかったようだ。

(吉行淳之介、「樹々は緑か」)

⑥の「それ」は先行の節「おどけて、ペン軸で志乃の頬を突つついた」という動作を表現する内容を持ち込んでいる。⑦の「それ」は先行の節「彼女が伊木の父親を愛したことがある」という心理的活動を含む内容を持ち込んでいる。

「行為・心情」は節レベルの言語単位で表現されることが多く、「物体」の場合と似ており、「ソレ」が用いられやすいと考えられる。

3.3.4 事態・様相を持ち込む場合

事態・様相は具体的な動作行為のように、一点に焦点を当てた動作ではなく、場面を切り取って、全体的な物事の状態やなりゆきを持ち込む場合である (【表 6】)。

【表 6 事態・様相の場合】

	語句	節	文	連文	合計
コレ	0	6	18	32	56
ソレ	5	28	69	42	144

【表 6】に見られるように、「コレ」は「ソレ」とほとんど同じ傾向で、**文と連文**レベルの内容を持ち込む例が多い。

⑧ ところが二三日たつ中に、内供は意外な事実を発見した。それは折から、用事があって、池の尾の寺を訪れた侍が、前よりも一層可笑しそうな顔をして、話も碌々せず、じろじろ内供の鼻ばかり眺めていた事である。それのみならず、嘗、内供の鼻を粥の中へ落した事のある中童子などは、講堂の外で内供と行きちがった時に、始めは、下を向いて可笑しさをこらえていたが、とうとうこらえ兼ねたと見えて、一度にふっと吹き出してしまった。用を云いつかった下法師たちが、面と向っている間だけは、慎んで聞いていても、内供が後さえ向けば、すぐにくすくす笑い出したのは、一度や二度の事ではない。

内供は始、これを自分の顔がわりがしたせいだと解釈した。

(芥川龍之介、「鼻」)

⑨ これも牛乳のような色の寒い夕靄に包まれた雷電峠の突角がいかつく大きく見え出すと、防波堤の突先にある燈台の灯が明滅して船路を照らし始める。毎日の事ではあるけれども、それを見ると、君と云わず人々の胸の中には、今日も先ず命は無事だったという底深い喜びがひとりで湧き出して来て、陸に対する不思議なノスタルジヤが感ぜられる。

(有島武郎、「生まれ出づる悩み」)

⑧の「これ」は先行の「それは折から ～ 一度二度の事ではない」の事実を表現する長い連文を持ち込んでいる。また⑨の「それ」は先行の 1 文、つまり「これも牛乳 ～ 照らし始める」という海から帰って、陸地に近いところで見えた全体的な様子を持ち込んでいる。事柄のなりゆきや事物の様相という抽象的な内容は短い言葉で説明しにくいので、文や連文レベルの長い内容で表現する傾向があると考えられる。

「事態・様相」の場合、「コレ」も「ソレ」も文と連文レベルの長い内容を持ち込むことが多い

が、詳しく見てみると、「コレ」において、連文レベルの内容が最も多いのに対して、「ソレ」は文レベルの内容が最も多く見られる。同じ「事態・様相」のカテゴリーであっても、「コレ」は「ソレ」より持ち込む内容は比較的長い言語単位で表現されるものに偏る傾向があると考えられる。

3.3.5 発話などの内容を持ち込む場合

小説には、発話や考えや手紙の具体的な内容が述べられ、「コレ」「ソレ」で受けてその内容を持ち込む場合がある。次の【表7】を見てみよう。

【表7 発話等の内容の場合】

	語句	節	文	連文	合計
コレ	0	1	8	4	13
ソレ	0	3	18	10	31

【表7】に示したように、発話等の内容を指し示す時、「コレ」と「ソレ」のいずれも最も多い例は文レベルのもので、次いで多いのは連文レベルの内容である。つまり、発話などの内容を表現するとき、一般的に情報量が多いので、文と連文のような長い言語単位で表現することが多いからである。次の例を見てみよう。

⑩ 三杯目のコップが繋がれたとき、女は突然こういった。

「先生、しるしとは何のことでしょう。」

これは貧生にむかっていったようであった。 (石川淳、「変化雑載」)

⑩の「これ」は先行の「先生、しるしとは何のことでしょう。」という女の発言内容を持ち込んでいる。文レベルの持ち込み内容である。また、次のように長い連文で表現された手紙の内容を持ち込む例もある。

⑪ 堯は母からの手紙を受け取った。

「延子をなくしてから父上はすっかり老い込んでおしまいになった。お前の身体も普通の身体ではないのだから大切にしてください。もうこの上の苦労はわたしたちもしたくない。

わたしはこの頃夜中なにかに驚いたように眼が醒める。頭はお前のことが気懸りなのだ。いくら考えまいとしても駄目です。わたしは何時間も眠れません」

堯はそれを読んである考えに慄然とした。 (梶井基次郎、「冬の日」)

「ソレ」は「延子～眠れません」までの手紙の長い内容を受けており、段落を越えた長い内容を持ち込んでいる。

「発話等の内容」を持ち込む場合、情報量が多く、「コレ」も「ソレ」も文と連文レベルの長い言語単位の内容を持ち込む傾向が見られる。

4. まとめ

以上、「人物」「物体」「行為・心情」「事態・様相」「発話等の内容」を言語単位によって分析し、「コレ」と「ソレ」の傾向を比較した。「コレ」「ソレ」を問わず、指示対象が同じカテゴリーであれば、持ち込み内容の長さ（言語単位）もほとんど同じ傾向であることが分かった。その結果は以下のようにまとめられる。

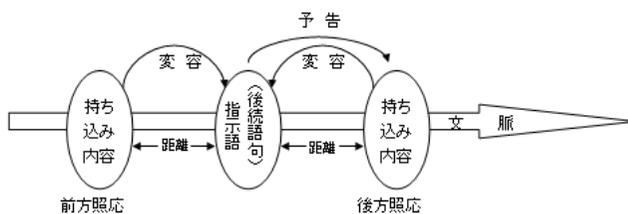
- 1) 指示対象において、「コレ」は「事態・様相」など抽象的なものを持ち込みやすいのに対し、「ソレ」は「物体」また「行為・心情」など具体的なものや動作を持ち込みやすい。
- 2) 持ち込み内容の長さにおいて、「コレ」は文と連文レベルの長い内容を持ち込みやすいのに対し、「ソレ」は語句、節レベルの短い内容を持ち込むことが多いが、文レベルの内容を持ち込むのも少なくない。つまり、「コレ」の持ち込み内容は比較的長いものが多いと言えよう。
- 3) 「ソレ」の持ち込み内容は、情報量が少なく語句か節レベルの短い内容で表されることの多い「物体」「行為・心情」など具体的なものを持ち込みやすい。「コレ」の持ち込み内容は、情報量が多く文か連文レベルの長い内容で表されることの多い「事態・様相」「発言等の内容」のような抽象的なものとなりやすいと考えられる。

この結果から「コレ」と「ソレ」の持ち込み内容とその長さに相関性があることが見出され、また「コレ」と「ソレ」の使用傾向の差異が見出された。ただし、これは持ち込み内容とその長さを現象として捉えたに過ぎず、その背景に働く原理はまだ十分に検討されていない。たとえば「物体」を持ち込む場合、基本的に「ソレ」が用いられやすい傾向があるが、少数でありながら「コレ」も 19 例見られる。「コレ」と「ソレ」はどんな選択基準で用いられるかはまだ明らかにされていない。今後さらに「コレ」と「ソレ」の選択の基準を別の観点から追及する必要があるだろう。

【注】

- (1) 片村 (1984) は小説の文章において、文脈指示であっても、「コ」は現場指示の機能を果たし、「ソ」は現場指示的な機能を持たず、文脈指示の機能のみ担うと述べている。金水・田窪 (1992) は「視点遊離のコ」の用法を提起し、小説などの文章に話し手の視点を自由に話中の登場人物に近づけることができると指摘している。藤井 (2004) は視点という角度から物語における指示語を検討し、「この」は描出表現に用いられやすいと指摘している。いずれも小説テキストの特徴を考慮して行われた指示語の研究である。
- (2) 市川 (1978) は「文段」という言語単位を設定しているが、佐久間 (2000) は談話の「話段」という概念を加えて、文章・談話を直接に構成する言語単位を「段」という概念を規定している。
- (3) 拙稿「指示語の文脈展開機能」(『同志社日本語研究』第 15 号 2011.09) において、文脈展開機能の定義づけとその四つの要素を指摘し、次の図で示した。

附図 1 指示語の文脈展開機能にかかわる要素



(4) 調査資料は以下の通りである。(総計 20 編、約 35 万字。すべて CD-ROM 版『新潮文庫の 100 冊』にある中・短編小説である。)

芥川龍之介：①「芋粥」、②「鼻」； 森鴎外：③「山椒大夫」、④「高瀬舟」；

泉鏡花：⑤「売色鴨南蛮」、⑥「女客」； 吉行淳之介：⑬「木々は緑か」；

志賀直哉：⑦「小僧の神様」、⑧「赤西蠣太」； 水上勉：⑭「雁の寺」；

梶井基次郎：⑨「ある心の風景」、⑩「冬の日」； 三浦哲郎：⑰「初夜」；

石川淳：⑪「焼跡のイエス」、⑫「変化雑載」； 大江健三郎：⑮「不意の啞」；

池波正太郎：⑯「まゆ墨の金ちゃん」； 有島武郎：⑱「生まれ出づる悩み」；

開高健：⑲「パニック」； 野坂昭如：⑳「焼土層」

(5) 「清兵衛と瓢箪」において、「ソレ」(19 例)は「コレ」(3 例)の 6 倍強であり、ほかの 20 編の小説の比率 (543 (ソレ) / 137 (コレ) = 約 4 倍) よりやや高い。

【参考文献】

庵 功雄 (2007) 『日本語におけるテキストの結束性の研究』 くろしお出版

市川 孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』 教育出版

片村恒雄 (1984) 「文章表現における指示語の機能—小説の文章を中心に」『表現研究』(39)

金水 敏 (1988) 「日本語における心的空間と名詞句の指示について」『女子大文学. 國文篇 : 大阪女子大紀要』 39

金水敏・窪田行則 (1992) 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『指示詞』 ひつじ書房

国立国語研究所編 (2004) 『分類語彙表』 増補改訂版 大日本図書

近藤泰弘 (1992) 「レ系指示詞の意味論的性格」『文化言語学』 三省堂

阪倉篤義 (1975) 『文章と表現』 角川書店

佐久間まゆみ (2002) 「接続詞・指示詞と文連鎖」野田尚史等編『日本語文法 4 複文と談話』 岩波書店

竹田完治 (2000) 「文章中の文脈を指示するソレとコレについて」『計量国語学』 22 (4)

張 子如 (2011) 「指示語の文脈展開機能」『同志社日本語研究』 第 15 号

東郷雄二 (2000) 「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」『京都大学総合人間学部紀要』 第 7 卷

時枝誠記 (1950) 『文章研究序説』 山田書院

長田久男 (1995) 『国語文章論』 和泉書院

馬場俊臣 (2006) 『日本語の文連接表現—指示・接続・反復—』 おうふう

林 巨樹 (1973) 「文章論・文論と品詞」『品詞別 日本文法講座 1 品詞総論』 明治書院

林 四郎 (1983) 「代名詞が指すもの、その指し方」『朝倉日本語講座 5 運用 I』 朝倉書店

飛田良文[ほか]編 (2007) 『日本語学研究事典』 明治書院

藤井俊博 (2004) 「物語文における指示語と視点：「羅生門」を通して」『同志社国文学』 (61)

吉本 啓 (1992) 「日本語の指示詞コソアの体系」『指示詞』 ひつじ書房

劉 驪 (2011) 「BCCWJ の文学書籍における文脈指示詞「この」と「その」—談話の内部構造の観点から—」
第三回中日言語対照学会

【付記】

本稿は、第 30 回表現学会近畿例会での研究発表を加筆修正したものである。ご指導やご教示賜りました方々に、特に藤井俊博先生に心より御礼を申し上げます。

**Contextual Expansion of *kore/sore* in Novels:
Focusing on the Central Factor of the Implied Contents**

Zhang Zirui

Keywords: *kore/sore*, Implied Contents, Transformation of Implied Contents

In this paper I analyze the differences between the implied contents of the demonstrative pronouns *kore* and *sore* as a central factor of contextual expansion. The data is drawn from “Seibei to hyotan” (“Seibei’s Gourds”) and twenty other novels from Shincho Bunko. From this study I confirmed the following phenomena: Within these novels, the use of *sore* generally denotes specific phrases or clauses containing little information tending to comprise concrete concepts such as “object” or “operation.” In contrast, *kore* is used to denote complex and abstract ideas that can span one or more sentences such as “situation”, “aspect”, or “contents of an utterance.”